地域文学

中野真琴（なかのまこと）

山口市

（1918～2011）

提供・中野茂樹

【著作】

『あじす史話』（昭和44・阿知須町役場）
『中野真琴短篇小説集』（昭和57・宇部市条例出版）
『山口という地方の文学雑記』（昭和58・宇部市条例出版）
ほか

中野文学は、生まれ育った阿知須の文化風土が原点となっているようである。

真琴の命名者は、現在「いぐらの館」で知られる旧中川家住宅の当主であった大伯父の中川令辰。氏は、明治二十五年十月に阿知須で発行された評論雑誌『周南』を出版した人物である。大正十一年には、文芸誌『里の鐘』が刊行される等、阿知須の文芸風土をうかがわせる。

そうした土地柄で育った真琴は、昭和六年、県立山口中学に入学すると、当時文壇で注目されていた仁保出身の嘉村礒多の作品を愛読するなど文学熱は次第に高まり、昭和十年、阿知須で『郷土』と称したガリ版刷りの同人誌発行に及ぶ。

國學院大學に進んだ真琴の文学熱は更に進み、同人誌『十人』に加わり編集委員として参加。重ねて『文陣』にも加わる。

学部に入ってからは、『渋谷文学』に参加するなど、文学熱は愈々盛んになる。そうした中、父の死と自身の病気のため、一年休学の止むなきに至る。だが、その間にも『渋谷文学』に随想「秋の海辺」「無人島」を送っている。共に季節感の漂う静かな筆致で、それまでの精進の程をうかがわせる作品である。

因みに真琴が公にした著作の第一冊は、昭和四十四年刊の『あじす史話』である。町長からの依頼であったが、書名を『阿知須町史』とはせずに敢えて『あじす史話』としたところに、文芸の目線で郷土を語る思いが伝わる。

やがて中野は、山口県内の文芸へと視野を展げ、『私の描いた山口の文学者たち』（昭和五十三年）・『山口という地方での文学雑記』（昭和五十八年）等々を刊行。

常々地方紙や県内の同人誌等にこまめに書きためていたものを教師生活が一段落したころから整理し、新たな作品集の数々を逐次発行に及んだことは、年譜に示した通りであるが、総冊数は二十冊に及び、すべて山口生まれの本である。

中野の教師生活で生涯の出会いとなったのは、宇部中央高校の前身、宇部市立高校での古川薫。

「学校の機関誌『里程標』が創刊されたのは、中野真琴先生着任後間もなくのことである。・・・中野先生を加えてある種の文学学校の雰囲気がただよいはじめたころ、そこに在学していたということは実に幸運だった。ぼくには運命的な中野先生との出会であった」と『山口新聞』（昭・五十七年六月二十一日）の―青春の挽歌『弟の出発』―の作品評の中で述懐している。

この作品に対する古川薫の寄稿は異例の十二段組というもので、直木賞候補作家として活躍中の氏の寄稿は読者の注目を集めたものと思われる。ここでは紙面の都合で左記に留めたい。

肉親への愛情、そして家の桎梏を荷った長男という個を通して、作者の目はその背景世界にむかっても鋭く突き刺さっている。「弟の出発」にただよう人間のかなしみは大陸に送られて行く幼い弟への惜別だけでなく、いたいけな少年にまで及ぶ〝戦争をする国家〟に対する怒りや嘆きが重なって共鳴するところに重厚な味わいがある。

（「弟の出発」は昭和十六年『早稲田文学』初出。）

振り返ると中野・古川両氏の絆は『里程標』以来六十二年。古川は中野との永訣に次の句を手向けた。

文士ゆくなほ一筋に雪の道

（文・多田美千代）

― 著書 ―

増補『私の中の山頭火』（よしの印刷）
『あじす夜ばなし』（四季出版）
『上野英信の生誕地にて』他（よしの印刷）